

Contents *****

特集：第2次高市内閣の緊急研究	1p
＜海外報道ウォッチ＞	
ミュンヘン安保会議と米欧関係	7p
＜From the Editor＞ 再読『城の崎にて』	9p

特集：第2次高市内閣の緊急研究

今週は第2次高市早苗内閣が発足しました。2月8日の総選挙は自民党の歴史的勝利でありましたが、これで政治が安定するかと言えば、かえって展開が読みにくくなったように思われます。そうでなくとも、今年は海外発（トランプ由来）のサプライズが多い年。内政面でも「予期せぬ事態」が絶えそうにありません。

それでは第2次高市内閣は、これから何をどういう順序で目指すのか。そして優先順位はどうなっているのか。高市内閣の「ゲームプラン」を急いで考えてみたいと思います。そのためにはまず総選挙結果の分析から。いつものような手法を使いつつ、この内閣の今後の政策課題や政治日程を検討してみました。

● 「2/8 総選挙」がもたらした地殻変動

2026年が始まってからまだ8週目。しかるにまあ、何とサプライズの多い年であることか。海外では「ドンロー主義」など物騒な話が相次ぎ、現在はイラン情勢が緊迫している。ミラノ・コルティナ五輪では、「りくりゅうペア」による大逆転劇のようなめでたいサプライズもあった。そしてこの間、国内政治も以下のように意外性の連続である。

- 1月10日（土） 読売新聞が「通常国会冒頭解散」の観測報道
- 1月16日（金） 立憲民主党と公明党が合流して、「中道改革連合」を設立届け出
- 1月19日（月） 高市首相が衆議院解散を表明
- 1月20日（火） 与野党がともに消費税減税を公約し、長期金利が27年ぶりの高さに
- 2月8日（日） 総選挙で自民党が大勝。衆院議席数の3分の2を超える
- 2月18日（水） 第2次高市内閣が発足。両院議員総会の自民党議員は総勢400人！
- 2月20日（金） 施政方針演説。令和8年度予算の年度内成立を目指す？

まずは今回の「2/8 総選挙」を振り返っておこう。自民党は予想以上の勝利となり、比例代表では候補者が足らずに、14 議席を野党に配分することとなった。「もったいない」「民意を損なう」との声はあるものの、比例代表の候補者には 1 人 600 万円の供託金が必要である。「案山子でもいいから立てておけ！」というわけにはいかないのである。

ともあれ、2026 年選挙は底が抜けたような自民党の大勝利となった。以下に選挙制度が現行制度になって以降の戦績を掲げておく。自民党が 3 分の 2 以上の議席を得たのは史上初めて。あの 2005 年の郵政解散でさえ 6 割を少し超えた程度だったのである。

○小選挙区比例代表並立制での衆院選挙結果

回	総選挙期日	内閣	命名	定数	自民議席数	シェア
41	1996/10/20	橋本内閣	小選挙区解散	500	239	47.80
42	2000/6/25	森内閣	神の国解散	480	233	48.54
43	2003/11/9	第 1 次小泉内閣	マニフェスト解散	480	237	49.38
44	2005/9/11	第 2 次小泉内閣	郵政解散	480	296	61.67
45	2009/8/30	麻生内閣	政権選択解散	480	119	24.79
46	2012/12/16	野田内閣	近いうち解散	480	294	61.25
47	2014/12/14	第 2 次安倍内閣	アベノミクス解散	475	291	61.26
48	2017/10/22	第 3 次安倍内閣	国難突破解散	465	284	61.08
49	2021/10/31	第 1 次岸田内閣	未来選択解散	465	261	56.13
50	2024/10/27	石破内閣	裏金隠し解散	465	191	41.08
51	2026/2/8	高市内閣	高いうち解散	465	316	67.96

ここまで極端な結果が出ると、それによってもたらされる有権者の負託は重いものとなる。高市首相は「予算の年度内成立を目指す」と言っている。これは従来の国会慣例から考えると非常識極まりない。衆議院が 3 月 2 日までに予算を成立させれば、確かに年度内の自然成立が可能になる。しかし、それでは予算の審議期間が来週 1 週間しかないことになってしまう。本日 2 月 8 日の施政方針演説を受けて、衆参の与野党代表者質問が行われることを考えれば、「無茶振り」もいいところである。

とはいえ、これだけの選挙結果を見せられた後では、過去の国会慣習がある程度、吹き飛んでしまうのも無理はあるまい。何しろ、野党第一党である中道改革連合は 49 議席しかない。単独では内閣不信任案も出せない弱小勢力である。これまで「与党の過半数割れ」に付け込んで要求を通してきた国民民主党も、いきなり手がかりを失った形である。

そうかと思うと、参議院では与党は相変わらず過半数に達していない。首班指名も参議院ではギリギリで成立ということになる。「選挙で大勝した後こそ、野党の顔を立つつつ慎重に国会運営すべし」というのは、古式ゆかしい永田町政治のセオリーである。さもなくば、かならず次の選挙でしっぺ返しをくらうから。ただし、あいにく高市氏自身は、そのようには考えていない様子である。

●自民党勝利を呼んだ票の流れ

次に本誌の恒例の手法に沿って、「2/8 総選挙」を振り返っておこう。比例得票数の推移に着目して、各党の党勢を見てみたい。

○衆院選「比例代表」の各党得票数

	2026年 衆院選	%		2024年 衆院選	%	2021年 衆院選	%
自民党	21,026,139	36.72	自民党	14,581,690	26.63	19,914,883	34.66
維新の会	4,943,331	8.63	公明党	5,964,415	10.89	7,114,282	12.38
中道改革連合	10,438,801	18.23	立憲民主	11,564,217	21.12	11,492,115	20.00
共産党	2,519,807	4.40	共産党	3,362,966	6.14	4,166,076	7.25
社民党	728,601	1.27	社民党	934,598	1.71	1,018,588	1.77
国民民主	5,572,951	9.73	国民民主	6,172,427	11.27	2,593,375	4.51
減税ゆうこく	814,874	1.42	維新の会	5,105,127	9.32	8,050,830	14.01
れいわ	1,672,499	2.92	れいわ	3,805,060	6.95	2,215,648	3.86
日本保守党	1,455,563	2.54	保守	1,347,392	2.46		
参政党	4,260,620	7.44	参政党	1,870,347	3.42		
みらい	3,813,749	6.66					
その他	13,014	0.02		42,239	0.08	900,181	1.57
合計	57,260,009	100.00		54,750,478	100.00	57,465,978	100.00
投票率	56.25			53.84		55.93	

- * 自民党は前回から実に 10 ポイント＝650 万票も増えている。比例代表の得票数が 2000 万票を超えるのは 2005 年の郵政解散以来。「安倍一強時代」の 2014 年は 1765 万票、2017 年は 1855 万票であったから、今回は強烈な「風」が自民党に吹いたことになる。
- * 問題は中道改革連合である。前回、1 年 4 か月前の選挙では立憲民主が 21%、公明が 11%を得票していたから合計 32%である。それが今回は 18%に減った。1 足す 1 が 1 以下になってしまった。「減税ゆうこく」の 1.4%を足しても 2 割に届かない。今回はとにかく「野党第一党が信じられないくらいに負けた選挙」であった。
- * さらに共産＋社民＋れいわの左派 3 政党を足した比例票は、前回は 6＋2＋7＝15%あった。それが今回は 4＋1＋3＝8%へ半減した。共産党は 2014 年には 600 万票＝11.4%も獲得していたのに、2026 年選挙は左派政党が総崩れとなった。
- * 今度は右派政党を見てみよう。参政党は得票を倍以上に増やしたし、日本保守党も微増である。維新の会もそれほど減らしたわけではない。2024 年選挙では「自民党の岩盤保守層が右の野党に流れた」との解説をよく聞いた。ところが 2026 年選挙では右派政党の票は減っていない。「自民党への回帰」はさほどではなかったようである。

それでは、今回、自民党が増やした 650 万票はどこから来たのだろうか？

第 1 に考えられるのは「ニューカマー」である。今回、投票率は前回比 2.4%増えている。票数にすれば 250 万票くらい。出口調査などでも確認できるが、「今回、初めて投票に行った」という若い有権者の票が「高市・自民党」に流れたことが考えられる。

次なる容疑者は「センターレフト」である。国民民主党が1.5%くらい得票を減らしているのので、この分が自民党に「戻った」ことが考えられる。加えて「立憲民主+公明」支持者の票も、一部は自民党に流れていたのではないか。特に公明党支持者は、来年4月の統一地方選挙を考えて、中道の候補者支援に熱が入らなかった可能性がある（地方議会は自公相乗りのところが多いから）。

3番目にありそうなのは「女性票」ということになる。これは確かめようがないけれども、普段だったら野党に投票している無党派層の女性票が、「今回は高市さんを勝たせたい」と自民に流れたことが考えられる。

●選挙で示された「民意」の裏側

以上をまとめると、①右派政党が勢力を一定に維持し、②中道改革連合と左派政党の支持が大崩れする中で、③自民党が「ニューカマー」の受け皿となりつつ、無党派層の支持を得て勢力を拡大したということになる。その原動力になったのは、党首のイメージ、まさに高市人気にほかならないだろう。

ここから先は筆者の想像となるが、高市人気はけっして盲目的な支持というわけではない。彼女は史上初の女性総理であり、良くも悪くも現状を変えてくれる可能性を秘めている。ただし支持者はよくわかっていて、「高市さんは言動が不安定で、危なっかしいところがある」「でも自分なりの考えがあつて、自分の言葉で語ろうとしている」と受け止めている。例えば彼女は、消費税の食品非課税を「私の悲願」と言い切ったが、普通の政治家はそんな言質を取られるようなことは言わないものである。

高市氏は党内ではベテランだが、世襲議員ではないし、派閥の支援があるわけでもない。「保守層」の強い支持があるとはいえ、「お友達」は少なく、党内基盤は弱そう。放っておいたら、自民党内で埋没していくかもしれない。それでは今までと同じことになるが、「自分が1票を投じれば、変えられるかもしれない」。こういうときに、投票行動は大きなうねりを伴うものである。

NHKの2月世論調査(2/13-15)を見ると¹、高市内閣支持率は65%で不支持は20%である。政党支持率では自民党支持が39.9%なので、やはり25%程度の「個人的人気」が上乘せされている。この部分が、突風のような今回の選挙結果を生んだのであろう。

ただし、その支持が「熱い」ものかと言えば、そこは疑わしい。NHKの調査では、自民党の歴史的圧勝については「よかった」28%、「どちらかと言えばよかった」32%と肯定的評価が多数を占めている。だが「戦後最短の選挙期間は適切か」と尋ねると、「適切ではなかった」との回答が53%を占める。また、「食料品消費税2年間ゼロ」について賛否を尋ねると、賛成が57%で反対の30%を大きく上回る。ところが、「物価高対策として効果があるか」と尋ねると、「大いにある」9%、「ある程度ある」38%、「あまりない」34%、「まったくない」12%と、ほぼ拮抗した評価となってしまう。

¹ <https://news.web.nhk/senkyo/shijiritsu/> (2月16日更新)

それでもこれだけ明確な選挙結果が出れば、高市内閣は十分に民意を得たということになる。そうでなくても昨今の民主主義国において、「与党の大勝利」は滅多にあるものではない。その値打ちは従来とは比べ物にならないのである。

”The Economist”誌は、2月14日号のカバーストーリーで”**The most powerful woman in the world**”と持ち上げている²。同コラムの末尾に曰く。「もしもこの内閣が失敗に終わった場合、日本が再び、これほどの機会を次の指導者に与えることはないだろう」。確かに自民党の歴史が教える通り、「大勝利の後には得てして大負けが来る」ものである。

●第2次高市内閣のゲームプラン

もっとも高市氏自身は、「早く仕事がしたくてたまらない」様子である。

予算審議を急ごうとしているのは、4月以降に安保関連の多くの政策課題に取り組みたいからであろう。国家情報局、対外情報庁などのインテリジェンス機能強化、スパイ防止法や外国人の土地取得規制の検討、さらに憲法改正や皇室典範の見直しなどもある。どれをとっても、「国論を二分しかねない」問題である。

「責任ある積極財政」は、令和9年度予算が本番になる。そのためには6月の「骨太方針」、8月の「成長戦略」のとりまとめが急がれるところである。消費税の減税と給付付き税額控除の導入については、「国民会議」での議論を加速しなければならない。

○今後の政治日程

- * 特別国会召集、首班指名 (2/18) ~ 会期は150日間 (7/18まで)
- * 高市首相が訪米、**日米首脳会談** (3/19)
- * **令和8年度予算が成立** (年度内? or 新年度入り?)
- * 2025年国勢調査の速報値が公表 (5月) → 議員定数削減問題が始動
- * **「骨太方針」**の取りまとめ (6月)
- * 国家情報局を創設 (7月?)
- * **「成長戦略」**取りまとめ (8月)
- * 臨時国会召集? (10月)
- * **APEC 首脳会議** (深セン、11月)
- * **G20 首脳会議** (マイアミ、12月)
- * 防衛三文書の改訂 (12月まで)
- * **令和9年度予算を閣議決定** (12月下旬)

一方で要注意なのは、3月の訪米と日米首脳会談である。トランプ氏は総選挙直前の2月5日、SNSで高市氏に「応援演説」をしてきている³。とはいえ、個人的な好意はさておき、首脳会談では「米国第一主義」で対日要求を突き付けてくるはずだ。

5月に昨年の国勢調査の速報値が公表されれば、議員定数削減問題に再び火が付くことも考えられる。ただしこの問題に深入りすると、いきなり国会が迷走してしまう恐れがある。せつかくのモメンタムを、失わないように気を付けたいものである。

² <https://www.economist.com/weeklyedition/2026-02-14>

³ <https://truthsocial.com/@realDonaldTrump/posts/116019257556623305>

●積極財政は「秩序ある」ものになるか

自民党が公約として掲げていた「危機管理投資・成長投資」については、既に以下の 17 の戦略分野が選ばれ、政府内で検討が始まっている。

「AI・半導体」「造船」「量子」「合成生物学・バイオ」「航空・宇宙」「デジタル・サイバーセキュリティ」「コンテンツ」「フードテック」「資源・エネルギー安全保障・GX」「防災・国土強靱化」「創薬・先端医療」「フュージョンエネルギー」「マテリアル（重要鉱物・部素材）」「港湾ロジスティクス」「防衛産業」「情報通信」「海洋」

「17 の目標」は数が多過ぎて、民間企業であれば「あり得ない」ことだろう。もう少し優先順位をつけるべきであって、この内閣の「悪い癖」と言えるかもしれない。

確かに電力インフラへの投資など、今の日本経済では明らかに足りていない。これらについては、歯を食いしばってでも投資を増やす必要がある。ただし現下の日本経済は人手不足が深刻化し、資材費も高騰している。

例えば、北海道ではラピダスの建設を急いでいるが、そちらにリソースが集中する結果として、北海道新幹線の延伸工事が遅れたり、札幌市内のビルの建て替え工事が止まっていたりする。労働規制の緩和など、供給面の改革を同時進行させる必要がある。単に投資の額を、資金だけ増やせばいいのではない。

加えて消費税減税の問題がある。2 年間に限って食料品への消費税率をゼロにするという。こちらは後に残らないものへの歳出拡大となる。筆者などは、「後の世代に対して申し訳ない」と感じる。しかも減税によって需要が増えるとしたら、供給力に限界がある現状ではかえって物価を上昇させるだけではないだろうか。

当面の財政状況には確かに余裕がある。インフレが始まって 5 年目の現在は、いわば「財政ボーナス期」だ。政府の歳入は物価上昇に伴って増加するから、毎年のように自然増収が出る。逆に歳出は、過去の国債の利払い費はデフレ期の「ほぼゼロ」だった利率のままである。ありがたいことに、この状態があと数年は続く。

問題はその後である。国債の利払い費は 2030 年代には急増するだろう。その頃になると、労働力人口も急速に減少していく。さらに名目成長率を金利が上回るようになると、過去の借金返済は加速度的に苦しいものになっていく。そうだとしたら、政府はここ数年の間に、なるべく過去の負債を返済しておくべきではないか。将来の地政学リスクや大型災害の可能性を考えても、財政の健全化ほど確実な安全保障はないのである。

考えるべきは、「責任ある」という言葉の意味である。高市内閣は積極財政という政策に対して民意を得た。だから「責任を果たしている」と言うかもしれない。ただし市場における信認はまた別の問題である。言い換え得れば、「責任ある積極財政」がかならずしも「秩序ある積極財政」となる保証はない。仮に将来、市場から「ダメ出し」を受けたときにこの内閣はどう対応できるのか。ここが一番、気になるところである。

<海外報道ウォッチ>

ミュンヘン安保会議と米欧関係

(観察対象：The Economist /NYT /FT)

昨年も今年もバレンタインデー（2/14-15）には、ミュンヘンで安全保障会議が行われた。昨年は米国からヴァンス副大統領が出席して強烈な欧州批判演説を行い、居並ぶ首脳たちを唾然とさせた。今年はルビオ国務長官が登場。その評判はどうだったのか。

The Economist 誌（2/14）は、“**America offer Europe warmer words, but a deep chill remains**”⁴（米は欧に暖かい言葉を呈したが、両者の溝はなおも深い）と評している。NATO を称賛する言葉はあったものの、受け止めた側の大半は警戒を怠っていないという。

- * 「我ら米国は、欧州が折り目正しく没落するのを礼儀正しく見守るつもりはない」とルビオは述べた。聴衆は安堵と拍手で応えた。ヴァンスよりは控えめだったからだ。
- * 大航海時代から現代まで、米欧の結びつきを強調した。アフガン戦争での犠牲を取り上げ、それを軽視するトランプを間接的に批判した。他の政権関係者とは違い、既存の秩序は救えるし、再構築する必要があると述べた。ロシアは勝っていない、とも。
- * グリーンランド問題による米欧の亀裂修復は難しい。「ヴァンスよりは洗練されていたが、根底にある『力こそ正義』というビジョンは同じだ」と EU 関係者は言う。
- * どこまでトランプに反発すべきかで意見が割れた。「米指導力は失われた」（独メルツ）、「国際秩序は破壊されつつある」（仏マクロン）、「断絶について語るのは危険だ」（英スターマー）など。「ルビオに安心するのは間違いだ」との声もある。
- * 家族の裏切りから立ち直れない家族のように、欧州は米国依存への認識を永続的に変えてしまった。トランプが退任しても、米国への信頼はもう戻らないだろう。

ミュンヘンではコルビー国防次官の演説も行われた。これも併せた会議全体の雰囲気 NYT 記事（2/15）が伝えてくれている。“**Three American Speeches at Munich, and Plenty of Confusion.**”⁵（3つの米ミュンヘン演説と混乱の日々）である。米欧は「伝統と価値観」の共有から「利益」の共有関係へ。大西洋同盟はこれからどこへ向かうのだろう。

- * 欧州はわずか1年の間に、トランプ政権から3通りの説明を受けた。口調は異なるが、いずれも同盟国を守るというワシントンの約束を制限する時代へと誘うものだ。
- * 第1弾は昨年のヴァンスによるもので、欧州民主主義を強烈に批判した。移民の波と極右政党への制限は、ロシアの侵略よりも大きな脅威であると指摘した。

⁴<https://www.economist.com/europe/2026/02/14/america-offers-europe-warmer-words-but-a-deep-chill-remains>

⁵<https://www.nytimes.com/2026/02/15/world/europe/three-american-speeches-at-munich-and-plenty-of-confusion.html>

- * 第2弾はルビオによるもので、上記をやや受け入れ易くしたものだ。米欧の理想化された歴史について語り、国境管理なくば「文明の消滅」に直面すると主張した。
- * そして第3弾コルビー国防次官は、価値観より共通の利益、「実務的な事象」に焦点を当てるべしと説いた。これでは欧州諸国が混乱するのも無理はあるまい。
- * ヴァンスとルビオは次期大統領選有力候補であり、国内の MAGA 支持者を気にしている。だが聴衆は NATO 加盟国だ。フォンデアライエン委員長はルビオ演説を「安心できる」とした。ヴァンスは NATO を「彼ら」と、ルビオは「我ら」と表現した。
- * ルビオはロシアの脅威には触れず、米欧をつなぐ白人キリスト教文明を擁護した。国家安全保障戦略は、西洋文明を保護するためだと言わんかのよう。だが彼は、ミュンヘン後はスロバキアとハンガリー、極右ポピュリストが支配する国を訪問した。
- * 歴史家曰く「ルビオ演説は巧みで欧州にとって危険だ。非白人を排除している」。欧州高官曰く「これは毒薬だ。米国の傘と引き換えに西洋文明の防衛を提示している」
- * この点、政治家でないコルビーは米国世論を配慮しない。彼は価値観に関する議論は確信が持てないから、利益など現実に基づいて提携しようと述べた。欧州人には受け入れやすい議論で、メルツ首相は「MAGA 運動は我々とは関係ない」と述べている。
- * 結局、どの米国が同盟相手なのか。さる政治学者曰く「欧州は自らを欺いている。ウクライナ戦争により、今や冷戦時代以上に米国に依存しているからだ」。彼らは米国による防衛費増額圧力よりも、国内政治への介入をより恐れているようだ。

ミュンヘン会議には米民主党の有力者、ニューサム加州知事も参加した。そちらの評価も気になるところで、FT 紙 (2/17) のエドワーズ・ルーズが **”It’s Gavin Newsom’s show for now”**⁶ (現時点ではギャビン・ニューサムの独壇場) で取り上げている。加州出身のイケメンが米国内で受けるって無理じゃね?とは、少々酷な物言いかもしれない。

- * 欧州指導者に次期米大統領選への選挙権があれば、ニューサムが最有力候補だろう。ダボスにも出たし、ミュンヘンにも来た。去年はブラジルの COP30 にも出ている。「トランプ現象は一時的なもの。彼は3年後にはいなくなる」と言い続けている。
- * 外国人よりも、国内民主党員の説得に手間取ることだろう。それでも彼は有利である。トランプに嫌われていて、攻撃を繰り出すことができる。選挙運動にも長けていて、民主党左派との対立を厭わない。カマラ・ハリスもそうすれば良かったのだ。
- * 賭けサイトでは圧倒的優位で、AOC やハリスを大きく引き離している。1997 年頃から大統領選の準備をしてきた。自伝『急ぐ若者』では敢えてそれをアピールしている。
- * 次期大統領選は公正さを確信できない。今年 11 月の中間選挙も同様。ニューサムは経済哲学が依然不明瞭である。彼は頂点を目指すのか、それとも戦って敗れるのか？

⁶ <https://www.ft.com/content/97cc9890-256b-4559-9626-779d9999cbb3>

<From the Editor> 再読『城の崎にて』

今月は兵庫県豊岡市の城崎温泉を、初めて訪れることができました。神戸新聞社さんの但馬政経懇話会の講師に呼んでいただきましたので。新幹線で京都駅まで来て、そこから山陰本線に乗り換えて「きのさき号」で向かいます。山陰本線は城崎温泉駅までは電化されているが、鳥取県に向かうその先はディーゼル車両となるらしい。

来る途中で、志賀直哉『小僧の神様/城の崎にて』（新潮文庫）を読み返しました。高校時代以来でしたが、果てさてこんなに短い話だったっけ。心境小説であって、城崎温泉の情景や人物はほとんど描かれていない。これでは舞台が他の温泉地でも、変わりはないか。いやいやこれが道後温泉であれば、『坊ちゃん』ではないけれども、もう少し楽観的な世界線になっていたのかもしれない。

『城の崎にて』という短編小説は、冒頭の書き出しが「山手線の電車で跳ね飛ばされて怪我をした、その後養生に、ひとりで但馬の城崎温泉へ出かけた」とある。そこで「自分」は生と死を見つめなおす体験をするのであるが、これは志賀自身の体験をもとにしている。志賀直哉が当地を訪れたのは1913年のこと。湯治養生は成功し、ご本人は健康を取り戻した。最後の部分で「三週間いて、自分は此処を去った」とある。その3年後に同人誌『白樺』に発表されたのが本作である。

城崎温泉は、629年にコウノトリが傷を癒していることで発見されたという古い歴史を持つ。ところが1925年の北但馬地震で温泉街は全焼した。ちょうど関東大震災の2年後のことである。現在の町並みはその後に再建されたもの。筆者が泊った和風木造三階建の旅館「まつや」さんも含めて、建物はこの1世紀に建ったものばかりである。

今の城崎温泉は、インバウンドも多くて繁栄している。旅館はカニ尽くし料理が売りである。おそらく志賀直哉が当地で過ごした頃には、松葉蟹などという贅沢品はなかったのではないか。はて、大正時代の湯治客たちはいったい何を食べていたのだろうか？

「まつや」さんには内湯があるけれども、さほど広くはないし、お勧めでもない。実は城崎においては、お客は外湯を巡り歩くのがセオリーでありまして、旅館が内湯を作るようになったのは「北但馬地震」の後なのだそう。それどころか、当時は「内湯など許すべからず！」と訴訟まで起きたとのこと。

ということで、城崎に来たからには外湯を楽しまない手はない。朝飯前に「一の湯」、朝飯後に「地藏湯」さんを試してみました。いずれも広いです。しかも2階は休憩所が作ってあって、これがまことに贅沢な空間である。しかも懐かしや、自動販売機ではコーヒ一牛乳を売っている。この感覚、若い人にはわからんだろうなあ。

外湯に出かけるときは、旅館の浴衣と雪駄で出かけるのが「正装」であります。城崎で旅館に泊ると、「〇〇屋」と書かれたQRコードを発行してくれるので、それを使えばどこの外湯も無料で入れます。全部で7つある外湯は休みの日や時間帯が違ったりするので、「コンプリート」はそんなに簡単じゃないみたいです。

こんな風に便利な外湯があると、地元民のおうちには「そもそも風呂がない」とか、「風呂があっても沸かすのがもったいない」ということになる。子どもさんたちが学校帰りに、「今日は××湯に集合な！」と言っているそうですから、それくらい定着しているようです。

ところで、これから城崎温泉を訪れる方にアドバイスを一点。当地には「但馬こうのとりの空港」がありまして、伊丹空港から JAL 便が飛んでおりますが、欠航が多いので信頼性に欠けます。「帰りの便ならいいだろう」と思って予約を入れてみたのですが、午前中に欠航の知らせが来ました。別に天気は悪くなかったんですけどねえ。

それから新潮文庫を読み返すときは、昔読んだ本を探すより新しい版を買うといいみたいです。先日の『老人と海』もそうですが、訳が新しくなっていたり、旧仮名遣いが変わっていたりしますので。世の中はまことに日進月歩でありまして、若いときに読んで「知ってるつもり」にしておくのが惜しい本が、この世には一杯あるようなのです。

*** 次号は 3 月 6 日（金）にお届けいたします。**

編集者敬白

株式会社 溜池通信 吉崎達彦
〒105-0003 東京都港区西新橋 1-2-9 日比谷セントラルビル 14 階
<http://tameike.net> E-mail: kan@tameike.net